人首町①　　人首町全景　一本町です　　本当の田舎だけど訪ねてみてください

詩碑「人首町」　宮沢賢治　大正 13 年 3 月 25 日？

雪や雑木にあさひがふり
　丘のはざまのいっぽん町は
あさましいほど光ってゐる
そのうしろにはのっそりと白い
五輪峠のいただゞきで
南につゞく種山ヶ原のなだらは
渦巻くひかりの霧でいっぱい

ひばりの声も聞こえてくるし
　やどり木のまりには
　　艸いろのもあって
その梢から落ちるように
　　飛ぶ鳥もある

菊慶旅館、賢治がハガキを投函した旧郵便局

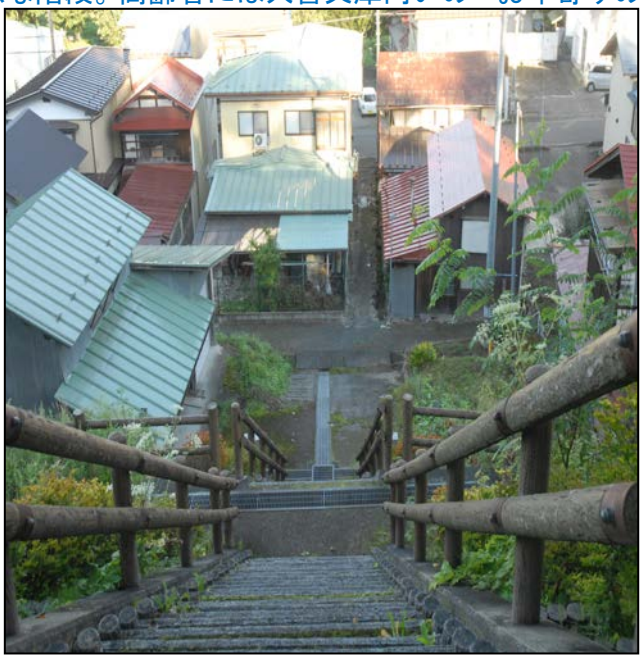
林務官官舎跡、大きい建物が地区センター体育館

西に奥羽山脈が見える桜の名所

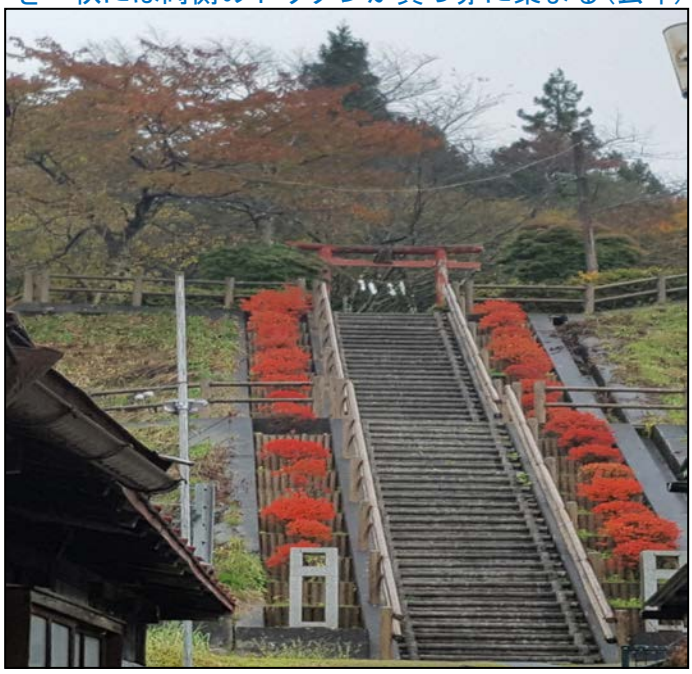
詩に登場する赤い鳥居

毎月第１日曜日には佐藤薫さん達が草刈り等の活動を続けています。月末は女の人達が草取りをしています。多謝！

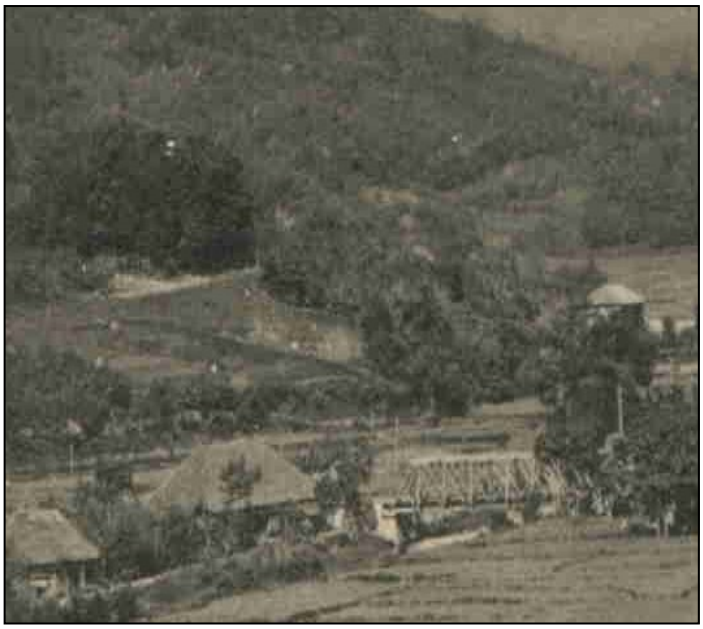
急な階段。高齢者には人首文庫向いの「お年寄りの道」を

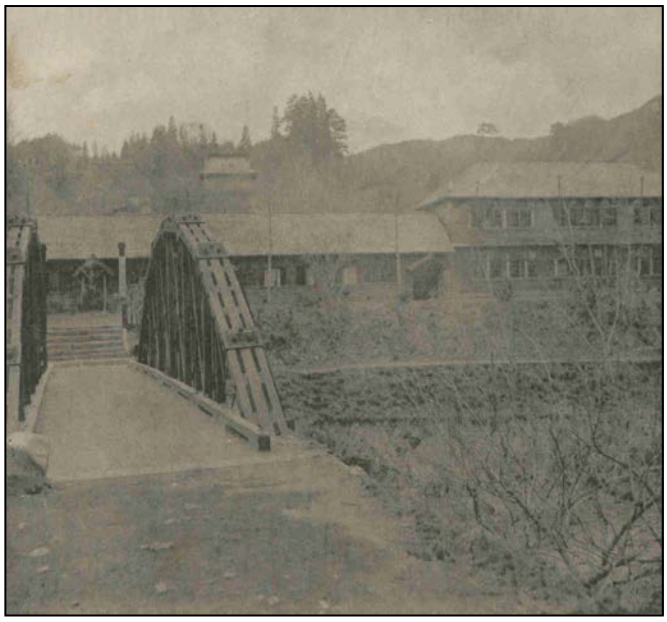


秋には両側のドウダンが真っ赤に染まる（去年）



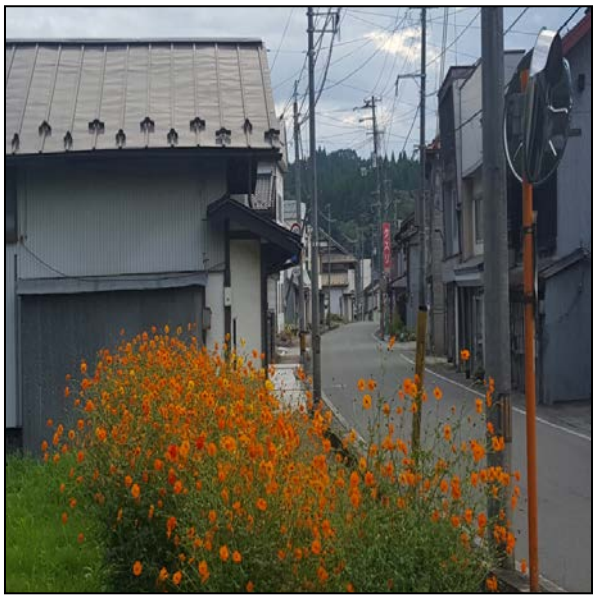
宮沢賢治が訪れた頃の新町橋と人首小学校及び丸い橋





五輪峠連山と人首町

佐藤半兵衛氏宅跡からの人首町



賢治が宿泊した菊慶旅館の２階の部屋から

左写真の逆方向から　正面がリニューアルされた菊慶旅館

今と昔　中央の白い建物が三陸銀行

人首カトリカ教会

人首カトリカ教会は明治 17 年頃聖堂が建立。ジャッケ神父やマリオン神父等が教会を守ってきましたが、戦後渡部夫妻が帰郷し教会に住み、長年を守り続けこられました。その後 3 人のシスター—が 5 年程守ってきましたが、彼女たちも去り、2011 年教会が取り壊され、1894 年にフランスから贈られた「アンジェラスの鐘」だけが残されました。宮澤賢治も人首を訪れた時には、この鐘を聴いていると思います。

カトリカ教会は、人首の子ども達にとって仏教徒であれ日曜日には教会に集まって、お祈りをし、賛美歌を歌い、神父さんのお説教を聞き、心の教育を受ける場でもありました。残された「アンジェラスの鐘」は 100 年以上も鳴り続けた歴史ある鐘でもあり、「心の教育の場」でもあった教会を守り続けたいと地区民が力を出し合い、水沢教会、振興会、大内住建等の支援を受け、鐘楼を改修し、花壇を作りました。

5 月には、週 5 日鐘を鳴らしている「放課後学習会」の小学生や地区民が集まり、水沢キリスト教会の高橋神父の祈祷の後、式典を行い、長年教会を管理し、鐘を鳴らし続けてきた中山昇幸さん、建設を支援して頂いた大内喜三さんに感謝状を贈呈し、労をねぎらいました。子供たちにとっては初めてのキリスト教の祈祷に興味津々の様子でした。今は、中山さんを中心にアンジェラスの鐘を鳴らし続けています。

教会管理者中山さんと遊学スクールの子供たち

鐘楼を修復し、十字架を取り付け、式典を実施

人首ハリストス正教会

明治 10 年頃にハリストス正教会が人首に伝わり、明治 14 年には人首ハリストス正教会が発足。明治 19～23 年には教会堂が竣工されたようです。鐘楼もあり二つの教会から鐘の音が人首町に鳴り渡り素晴らしい音の風景だったことでしょう。この教会は昭和 8 年の大火で焼失し、再建されましたが、完成間近の昭和 27 年に再び焼失してしまいました。再建された教会堂の礼拝堂は子供会の活動の場でもありました。

ハリストス正教会堂跡

人首にハリストス正教会（ロシア正教）が発足したのは明治十四年ですが、教会堂が建設されたのは明治二十三年でした。関係資料には、次のように記されています。

木造ながらビザンチン建築で、四間に六間半、鐘楼を持つ四層からなる堂々たる建物で、世人をして瞠目した会堂でした。この教会堂は人首町中央、一反歩の敷地を選び、一段高い奥に会堂が建てられ、その高さは頂上の十字架まで五十尺もるので、何処からでも望み見られました。

街道に面した百八十坪は庭園とし、門柱から左右に木柵を巡らし、上手下手には枝垂柳の巨木、園内には松・梅・オンコ・木蓮樹・ヒバ等を植え、巨石を配し池を掘るなど、風致を整えるものでもありました。しかも堂内の聖像壁画は十数種にも及び、「荘厳華麗を称されて」います。「山間の僻邑に、斯様な教会堂があることに旅行者は奇異の感を抱いたのも、不思議ではない」と。

この種の会堂は、当時としては郡内はもちろん盛岡・一ノ関にさえ見られなかったことを思えば、その頃の人首の信徒信仰心が、如何に盛り上がっていたかが窺われます。この頃には信者三百名を越し、隆盛さを示しています。そして二十六年には、ニコライ僧生が東北巡回の際、人首に再来しています。

新装成った会堂巡錫です。

大正六年と同十三年の二度、賢治が訪れた時、自然に彼の目にも映ったと思われますが、その後この教会堂は昭和八年の町の大火で焼失しております。

＊注＝現在は私有地ですので、立入禁止となっています。

賢治街道を歩く会

二代目ハリストス教会の写真を探しています。

「種山ヶ原は今⑩」

キャンパーでいっぱい

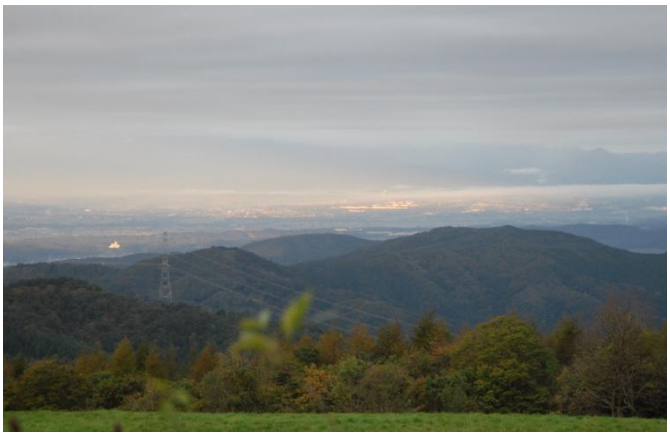
星座の森　オートキャンプ場、ロッジ

アメダス観測所

遊歩道から物見山を

アメダス　朝日をうけて

種山ヶ原の日の出



種山ヶ原からの北上平野

鹿が 8 頭程が群れていました

今年は延 100 名程で草刈り完了　平均年齢は７５以上かな

雄鹿の動きが激しくなり、親子の鹿は逃げまどっています。しかし、夜になると牧草地に 50 頭もの鹿の集団で牧草は 3 割程食べられるとか。畜産農家も大損害です。　星座の森も秋に

ツリフネソウ 2 種

案内板設置　「宮沢賢治と人首」

菊池春男さんとセンター長千葉時男さん

９月 22 日地区民からの要望で、振興会が 2 つ目の総合案内板を旧木細工中校庭に設置。

春男さん、旧木細工小学校の管理いつもご苦労様

＜旧木細工小学校校舎管理の菊池春男氏　撮影＞

切り絵画家藤城清治さんが旧木細工小学校をスケッチ　この後種山ヶ原を訪れスケッチ

その時の「風の又三郎」等が藤城清治「旅する影絵『日本』」に掲載されました。

「民話の里　米里」　　案内板を米里振興会がトコトン水車に設置

＜水車小屋を守っている浅倉今朝雄さん＞
最近は色々便利な機械ができ、水車を利用するのは米や吉備麦を製粉する時ぐらいとか。むしろ見学者の方が多いと言う。田舎の貴重な風景でもあり、守っていきたいと言っていた。元気で頑張って欲しい。来春は鳴瀬振興会周りに菜の花が咲くらしい。案内板には「日本のグリム」佐々木喜善さんにこの地方の民話等を教えた浅倉利蔵さんについても書かれており、浅倉利蔵さんの元生家が近くにある。

放送劇「ひょっとこの由来」

「ひょっとこ」の昔話は、全国のいたるところにありますが、昭和 24 年にもう一つの「ひょっとこ」の話が生まれました。金田一京助先生を中心とした三省堂の教科書編集委員が放送劇「ひょっとこの由来」を書き上げました。その年ＮＨＫ「ことばの泉」で放送され、翌年には国語の放送劇の教材として教科書「中等国語三下」（三省堂出版）に掲載されました。この放送劇は、興味深いことに佐々木喜善と米里のおばあさんの対話で始まり、設定場面がこれまでとは異なり、爺さんが伐ってきた薪を「穴」にではなく、ぐるぐると渦ができる「沼」に投げ入れるという設定です。

奇しくもここ米里の山大畑はカルスト地形で、ドリーネと思われる「大なべ小なべ」と言う水無し沼がある。大雨が降ると水が溜まり、その水が地下に抜ける時に、水面に渦ができるという。あくまでも伝説だが、その現象の可能性はその地形から大きい。

まるで金田一先生方が米里に来て、昔話「ひょっとこの始まり」等を基に楽しいお話にまとめてくれたように思われてならない。

1　『ひょっとこの由来』のあらすじ」

昔々、奥州のある山奥にお爺さんとお婆さんが住んでおりまました。ある年の暮のこと、お爺さんが柴刈りを終え、

沼のほとりに着くと、沼に渦が巻き、木の枝がグルグル回っているではありませんか。やがて　木の枝は渦の中に消えていきます。お爺さんは不思議に思い、自分の伐ってきた薪を池に投げ入れると、やはり消えていくのでした。
お爺さんはすっかり喜んで伐ってきた薪を全　部投げ入れてしまい困っていると、きれいな娘が現れ、沼の中に案内されました。そこにはまるで竜宮城のような立派なお屋敷があり、そこの主が、薪のお礼にとごちそうや踊りでもてなしてくれました。帰る時に、顔は好くないが福の神だから、この童子を連れて行くようにと言われ、連れて帰りました。その童子は火起こしが上手だという。なるほど小さな火種からまたたく間に火が勢いよく燃えたのです。その童子が来て以来、なぜか良いことばかり続き、お爺さんの家は村一番の大金持ちになりました。しかし、お婆さんは、その子が気にいらなくて、お爺さんの居ぬ間に家から追い出してしまいました。するとお爺さんの家はたちまち元の貧乏暮しになり、それがいやになった婆さんは有り金残らずもって逃げてしまいました。
　ある晩、悲しんでいるお爺さんの夢枕に男の子が現れ、「一緒には暮らせないが、火を吹いている自分に似た顔を木か壁土で作ってかまどのそばの柱に掛けてくれれば、魂がつながって沼の国にいてもお爺さんを守ってあげるから。」
その子の話のように、お爺さんは早速お面を作り、柱に掛けたところ不思議とそれ以来また良いことが続き、やがておばあさんも悔いて、家に戻り、二人は幸せに暮らしたという。

２「渦のできる沼」

　金田一春彦先生は、これまでの「ひょっとこ」の話とは場面の異なる面白い放送劇を書き上げてくれました。米里には、その舞台と思われるような沼があります。それは、平家落人伝説の山大畑地区にある、通称「大なべ・小なべ」と呼ばれる溶食凹地です。石灰岩が雨水等で溶け、すり鉢状になっています。地質学上「ドリーネ」と呼ばれており、何らかの地下変動で底には小さな亀裂ができ、大雨が降ると水が溜まりますが、水が抜けて行くので、水面には自然に渦ができると思われます。
　尚、この部落の人達は実直で苗字も平沢と言い、墓墳には東日本にはない実に大きな石積みの墓もある。今はもう３軒だけの部落だ。

３「ひょっとこ」は福の神

　この地方では、家を建てる時、福を呼ぶ守り神として家主が壁土や

木でお面を作り、竈（かまど）の傍にある柱に掛ける風習があり、約二百年前に壁土で作ったお面一体、木彫りのお面数体が確認されています。「竈仏様（かまぼとけ）」「竈神様（かまがみ）」「竈地蔵（かまじぞう）」などと呼ばれ、今なお大切に祀られています。また一方、お神楽のおどけ役「ひょっとこ」の面として笑いを誘い、人々を笑顔にしてくれる福の神でもあります。

「ひょっとこの由来」

この話は「ことばの泉」（昭和二十四年ＮＨＫ放送・金田一春彦）の台本で、中等国語三下（昭和二十五年三省堂編修・作金田一春彦）のシナリオ「ひょっとこの由来」を基に、及川慶郎氏の再話を参考に地元のこども達のために昔話風に書き換えたものです。

昔々、米里の山大畑という所に、木こりの爺さまと　婆さまが　住んで居だったと。
爺さまが　山さ行って、木を伐って薪にして、町で　それを売って暮らしていたんだと。
或る年の　遅い秋のこと、爺さまがいつものように　山へ木を伐りに行って　薪を背負っての帰り道の出来事。

「今日はどうも　いっぱい背負いすぎだな、でも
このぐれぁ　背負って帰んねぇど　この正月の餅
食ねぇしな。」　いたんだと。

「若げぇ時ど違って、無理がきかなぐなったなぁ・・・。」

と、ぼやきながら歩いていると、何所からともなく　水の音が聞こえてきたので、音の方向さ歩いて行くと　やがて　沼の畔へやって来たんだど。いたんだと。

「あゝ　重がった　日暮れまでにはまだ間があっから　どれ　休んでいくべ。」
どっこいしょっと　腰を下ろして、一服しながら　沼を見ていると、沼の様子がいつもと違って、渦巻ができていて　大きなゴミがグルグル回って　スー・スポン、スー・スポンと巻き込まれて入って行ってしまったんだと。
爺さまは、その様子が「なんとも　不思議だなぁ・・・」と感じたんだと。
見ていてばかりでは飽き足らず
「よーし　この薪を投げてみっか・・・。そー　れっ。」と、渦巻きに薪を投げ込んだんだと。
投げ込まれた薪は　グルグル回って
渦の中に吸い込まれて行ったんだと。
爺さまは、手を打って喜び、　また一本
もう一本と夢中になって投げ入れ、気が
付くと　今日伐ってきた薪の全部を　沼さ

放り込んでしまったんだと。
「しまった。　困ったな・・・　家さ帰ったら　婆さまに怒ごられる　困ったなぁ　なじょすっぺ・・・。」
爺さまが　がっかりして　坐っていると、
突然　水の中から　美しい娘っ子が現れたんだと。
「もしもし　お爺さん・お爺さん」
「うっ　いったいお前さんは　どなた様ですか。見だこどもねぇ娘さんだども・・・」
「びっくりさせてごめんなさい、わたしはこの沼の御殿に住むものの娘でございます。ただ今　薪を沢山下さいましたのは　貴方さまでございますか？」
「へい・へい、私でごぜいますが・・・。」
「まあ　そうでございましたか。それはそれは　ありがとうございました。実は沼の御殿では薪が無くなって困っておりました。貴方さまから　あんなに沢山頂戴することができまして、父が大喜びなのでございます。それで、是非わたくし共の処へお招きして　お待遇をしたいと申しますので　私がお迎えに参った次第です。」
「へぇ　私をですか、とんでもねぇごったす　しかし私は　沼なんかに入れねぇし・・・。」
「いえいえ　そんなご心配はいりません。さぁさぁ　私の手につかまって、ちょっとの間　眼を瞑むっててくださいな。」
爺さまは、娘にあんまり勧められるので、娘の手っこを握って　眼を閉じたんだと。そして、二人は、渦の中に消えていったんだと。
「お爺さん・お爺さん、眼を開け下されや。」
と、言われて眼を開けると　沼の中とは思えない　すごく立派なお座敷があって、その家の庭先には、爺さまが　投げ込んだ薪が、きちんと　積み重ねてあったと。
爺さまは、驚いて
「へぇ　こりゃあ　沼の中にこんなに立派な御殿があるなんて　びっくりしたなぁ　まるっきり夢で見た　竜宮城みてぇだじゃ・・・。」
爺さまは、若い娘たちに迎えられ　立派なお座敷に通されたんだと。

座敷の中央には、白髯の主の爺さまが居って　ここでも　薪の御礼を言われたんだと。
主が「さぁ　皆の者　御馳走を運べ
それから　唄と踊りだ」と言うと、娘たちは御馳走を運び楽器を鳴らして
唄って踊って観せて　爺さまを大いに待遇　楽しい時を過ごしたんだと。
「さぁさぁ　もっと召し上がれ！　さぁ　もっとお酒を持ってきて！」

「いやいや　もう　お腹いっぱい御馳走になったし、日も暮れできたので・・」
「実のところ　家さ婆さまを残して来たがら、もう　帰んねぇど・・・」と、断ったと。
　「ほう、それは残念だ。それでは　何かお土産でも・・・。」と
帰りがけに、白髯の主が、爺さまに
「お礼と言っても　何も無ぇが、お爺さまには　子どもがお在りなさるかな。」
「いえ、居ねぇがす」
「それは好都合、お礼の印に　この童子を遣るから、連れて　行きなされ。」
「この童子は、この通り見かけは甚だまずい顔だが　この童子は福の神だて、大事にかわいいがってくだされや。」と　言われたんだと。
　爺さまは、ふと　その童子を見ると、これは又　なんとも　見っともない顔立ちの子だったので、爺さまは　呆れて、
「ありがたい話ですが、まず　いいから　いいから・・」と　連れて帰るか迷っていると、その童子が
「お爺ちゃんお爺ちゃん、変な顔の私が嫌いかい。」と言ったど。
　是非　連れてってと　懇願われるので、あんまり気が勧まなかったが、断るのも悪いと思って仕方なく　爺さまは　その童子を連れて帰る事にしたんだど。
「では　一緒に行ぐが・・・。」
「うん　行きますよ！　今日からお爺ちゃんの子になるんだから　よろしくね。」
「では　娘よ、二人を池の畔まで送り申せ。私はここで失礼しますでな。」
　爺さまは、お待遇に感謝し、皆さんに深々と頭を下げて、娘の案内で帰る事が出来たんだと。
　爺さまが　その童子連れて家さ帰って来ると、留守していた婆さまが
「あ　爺さまや　何所がで　何があったのが、怪我でもしたんじゃねぇがど　心配しでだところだ。こんなに晩ぐなって　心配で心配で　仕方ながったんだがら・・・。」
「いやいや　心配かけて申し訳ながった。」と詫びて
そして、今までの不思議な出来事を　説明したんだと。

「婆さま　実は　お土産があるんだ。」
「へぇ　私すに？　そりゃ　何だべ？」
「男童子　預って来た。ほら　この童子だ。」
男の子は、
「お婆さん　宜しくお願いします！　今日から　僕はお婆さんたちの
子どもになるんで　宜しくお願いしますだ。」と挨拶したんだと。
爺さまは、
「家では子どもがねえがら　丁度良いと思って貰ってきたじゃ・・・。」
しかし、婆さまは無遠慮にも

「うん　でも爺さまよ　ぜぇぶめぐせぇ童子だな。額が出でさ鼻っこ低くて・・・。」と、意地悪な言葉で云ったんだと。

童子は、

「僕、火を吹いて熾すのがとっても上手いんだ。やってみましょうか。」と言って、竈の所さ行って、火を吹き始めると　小さな火種から　またたく間に、火の勢いが上がったので、爺さまと婆さまは驚いて、そして　喜んだと。

ところが婆さまは、「うんだども　何通顔つきだべ　フグみてぇにほっぺを膨らまして　タゴみてぇに　口尖がらかしてさ。」

でも、爺さまは、とても嬉しそうに

「しかし　在り難てぇじゃねぇが、こんなに勢いある火が点ったではねぇが、これがらは　この童子に　火起し頼むべしさ・・・。」

「さぁ　今夜は　遅いがら寝っぺ・・・。」

この様にして、池の御殿から来た童子は、爺さまと婆さまと一緒に住む事になったんだと。

この童子が住むようになってからというもの、爺さまの家は　不思議という位　良い事ばかり続き、たちまち　村一番の大金持ちに　なったんだと。

ところが、このように暮らしが良くなってみると、欲には　切りがなくて、婆さまの心に　ある変化が起こって来たんだと。

婆さまは、この見っともない童子が　目障りでたまりません。どうにかして、家から追い出してしまいたくて　仕方がありません。

或る日のこと、爺さまが仕事から帰ると、

「爺さま爺さま、今日は疲れたべ　さぁ　早ぐ風呂さ入って・・・上がったら酒っこもあるしな・・・」と

婆さまの　ご機嫌のお待遇に爺さまは不思議そうに、「今日は馬鹿にご機嫌がいいんじゃねえが。何が　あったのが？」と　聞いたんだと。

「うんうん　別に何も・・・、」

「うんだども　実はな、あのー　爺んつぁ怒んねぁでけろなや！」

「怒りゃしないよ、何があったのが。どうしたんだや。」

「実はな　今日あの童子　あんまり言うこと聞かねぁがら　怒ったところ　外さ出て行ったしまっただ、そして　それっきり　帰って来ねぇんだ。」

それを聞いて　爺さまは　悲しんで　慌てて　捜しに出て行ったんだと。

とうとう　童子は、それっきりお爺さん達の元へ帰って来る事はありませんでした。

童子が出て行ってからというものは　どういう訳か　爺さまの家には　悪い事ばかり起こるよ

うになって　一年もたたない内に　また昔のような　貧乏な暮しになったんだと。
　そうした或る日、婆さまと爺さまが　ふとしたことから口争いしたのが原で、婆さまは　爺さまが留守の間に、少しばかり残していたお金を持って　家出をしてしまったんだと。
　婆さまは　その晩　とうとう帰って来ませんでしたとさ。
　たった一人になった爺さまは　寂しい気持ちで過ごしながら　今までの事、これからの事を考えながら　一人でワラの布団の中に入って寝ていたんだと。
　ぐっすり寝ていた夜中に
　とんとんとん　と　戸をたたく音がして　外がら
「お爺ちゃんお爺ちゃん　僕です　僕ですよ！」という声がしたんだと。
戸を開けてみると
「僕だよ　お爺ちゃんに可愛いがってもらった　童子どもです。お爺ちゃん　暫く振りだったね。」
「おお　よく来てくれた　暫く振りだ！　おれはお前に　逢いたくて逢いだくて　うんと探したんだ。ささ　中さ入れ　さぁさぁ　中さ入れ！」
「お爺ちゃん　それが駄目なんです。僕　あれから　また　沼の国へ帰ってしまったんです。もうお爺ちゃんとは暮らすことが出来なくなったんです。」
「まさが　そんな・・・　本当が？」
「うん　でも僕も　お爺ちゃんと一緒に暮らしたい気持ちで一杯なんで　こうして出て来ましただ。でも、この世で暮らすこと　それが出来ません。だけど　お爺ちゃんには何んとかして　恩返しをしたいと思って　思案しているところです。」
「そうだ、お爺ちゃん泣くな　お爺ちゃんと一緒にいるためには　こうしてくれませんか。あのねお爺ちゃん・・・　僕は　よく竈の火を吹いていだったろう、あの時の顔に似た面子を　土か木で作って　毎日　よく見える、あの　竈の前の柱さでも　掛けて置いてけろ。そうすれば　僕の躰は沼の国に居っても　魂はお爺さんの傍に居て　お爺さんを大事に守ってあげるから・・・。家も　いつまでも　富み栄えるから・・・。」
と、夢枕に教えてくれたんだと。
爺さまは、

「おいおい　お前　もう行ぐのが。おい　待ってけろ　待ってけろってば。」
一生懸命追い掛けている　その時　お爺さんは　夢から目が醒めて・・・。
「ああ　今のは夢だったか。しかし　なんだが本当の事みでぇだったなぁ。」
「うん。今あの童子　何んと言ったけな、『僕の　火を吹く時の顔を　お面に作って　竈の前の柱に掛けで置げ・』だったがな・・・。」
「よーし　童子の　言う通り　面子作ってみっか。自分だって　昔取った杵柄だで、まんず　一つ

作ってみっか。」
あの童子は　もっとほっぺを膨らましていだっけな・・・、目の片方は　少し小さぐ・・・
だんだん似てきているぞ。は・は・は・・・。」
爺さまは、お面作りに夢中になっていました。
　　いつの間にか　婆さまが家に帰って来てで　爺さまのお面作りを　じっと
後ろで見ていたんだと。
　婆さまは　お面の顔を見ながら　ふと　声を出して笑ったんだと。
　爺さまは、びっくりして　後ろを振り向き
「なんだ　婆さま帰っていだのが、どこさ行ったべど思って　心配で心配で　寝だ空もねがった。
ああ　帰って来てくれで吉がった。」
「爺さま　申し訳ねぁがった。すまながった。やっぱり　爺さまと暮らすのが一番だと思った。戻
るの　お恥すと思ったが、けんど　まだ　一緒に暮らしてじゃ・・・。」
「うんだうんだ　それがええ事じゃ。どうじゃ　このお面　あの童子が火を吹いているどご　そっ
くりだべ。どうだ！　は・は・は。」
　童子の　謂う通りにして、　仕上がったお面を　竈の前さ掛けて置いたどころ、　爺さまと婆さ
まの家には楽しそうな笑いが戻り　そして、穏やかな日々が過ぎ、やがて　そのお面のお陰げでし
ょうか　二人にまた運が向いてきたんだと。
そして　爺さまと婆さまは　いつまでも　幸福に　暮らしたんだど。

　カットは白川工夫妻に描いて頂きました。

　この　童子の　名前を、〝ひょっとこ〟　と言ったが、この話を聞いた　近所の人達は、面を作って飾ると「家が富み栄える」と。それからと言うもの、吾も吾とも、ひょっとこの面を、粘土で作ったり、木彫りにしたりして、竈の側の柱さ　懸けて置くようになったんだとさ。
　所によっては、この面を、火男とも竈地蔵、竈仏、竈神様**と**も　呼んでいるとのことだどさ。
(米里には土製１、木製５が確認されている)